1963年9月20日 第3種郵便物許可（毎月一日発行）

福音新聞
THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教100～110周年標語
감사의 백년, 소망의 백년
感謝の百年、希望の百年
（데살로니가전서 5:18）

2015年4月1日（水） 第740号
発行所 福音新聞社（1部100円）
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398
発行人/趙重來・編集人/金柄鎬
fukuinshinbun@kccj.jp（福音新聞）
shinacho2003@daum.net（担当者）

2015年 復活節メッセージ

復活の恵み

マタイによる福音書２８：１～１０　　金必順牧師（関西地方会会長、堺教会）

復活の目撃者

マタイの証言によれば、主イエスの復活の目撃者には二通りのグループがありました。一つは、祭司たちから派遣されて墓の番をしていた番兵たち、もう一つは最後の最後まで主の十字架の死を見届け、墓に納められるまで従った女性たちです。

女性たちの中でも、四つの福音書のすべてにその名が記されているマグダラのマリアは、女性の弟子たちのまとめ役を担っていたと考えられます。女性たちは、墓で天使から主の復活を告げられました。天使は、「ガリラヤで主に会う」ようにと、弟子たちへの伝言を女性たちに託しました。弟子たちに報告するため、急いで走っている途中、復活の主が直接彼女たちの前に現れ、女性たちは主の前に「ひれ伏した」のです。「ひれ伏す」とは礼拝するということです。復活の主を最初に礼拝したのは女性の弟子たちでした。

毎週ごとに私たちは、この復活の主にひれ伏して礼拝を行っています。復活の主を礼拝するのではなく、牧師に会うため、また、友人と話すために教会に来るというのであれば、それは礼拝の本質から離れています。教会の中心である礼拝は、復活の主との出会いなくしては成立しません。

復活の主イエスは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と宣言されました。この宣言によって、私たちは復活の出来事から２０００年を経た今日まで、またこれからも、主が再び来られる時まで、主が共におられることを確信して礼拝をささげ、この世を生きて行くのです。

一方、大祭司から派遣された番兵たちは、祭司長に事の成り行きをすべて報告しました。祭司長たちは長老を集めて相談し、「イエスの弟子たちが夜中にやって来て、自分たちが寝ている間に死体を盗んで行った」と嘘の証言をさせることにしました。このような経緯から、ユダヤ教では今もイエスの復活を認めない立場を貫いています。これに対し、弟子たちは復活の主を礼拝し続け、このことによって、キリスト教はユダヤ教から独立したのです。

復活の主と出会って

十字架刑の判決が出て、弟子たちは皆逃げてしまいました。ペトロでさえ、三度も主を否定しました。このような弱い弟子たちですが、復活の主と出会ってからは、迫害の恐れがあるエルサレムにわざわざ行って、神殿で大っぴらに「イエスは神の子メシアである」と宣べ伝え始めたのです。捕えられても、投獄されても、鞭打たれても、やがて殉教の死を遂げることになっても、もう二度とイエスの弟子であることを否定しない人間に生まれ変わったのです。この１８０度の転換の中心にあったのは、復活の主との出会いでした。

卑怯にも主イエスを見捨て、見殺しにした弟子たちですが、その裏切りと罪にもかかわらず、主のほうから「会いましょう」と言ってくださったのです。このように弱く、罪深い者のために十字架にかかってまで愛し、なお信頼してくださるイエスに出会ったことで、弟子たちは主の愛に応えずにはおられない存在に変えられたのでした。

主イエスの復活が示すことは、神の愛は、罪と死よりも強力であるという偉大な事実です。神の愛は、私たちの人生をつくりかえます。荒れ野のように荒れ果てた私たちの心に、花を咲かせる力です。

復活の恵み

この愛のゆえに、神の子は人となり、へりくだり、自分を捧げつくす道を歩まれました。そしてついには、罪の支配する陰府に降りました。憐れみ深い神の愛は、イエスの死んだ体に光を注ぎ、それを変容させ、永遠の命へと過ぎ越させたのです。ただし、イエスは元の地上の命へと生き返ったのではありません。神の栄光の命に入られ、私たちにも希望の未来を開かれたのです。主の復活によって、私たちも新しい存在として造りかえられました。

復活の恵みは、人間を最後まで前向きに生かし、与えられた命を完全燃焼させる力をもたらします。その理由について、宗教改革者マルチン・ルターはこう言い残しています。「クリスチャンは、キリストのいらっしゃる所にこそいるべきです。もしも、キリストが墓におられないのであれば、クリスチャンもそこにいるべきではありません。」

この意味は、復活の主と出会った私たちは、滅びとしての死、裁きとしての死、罪の敗北としての死、そうした死の暗さや恐れ、脅迫の中に閉じ込められてはいけないということです。暗闇を超えて、復活に表された勝利と神の愛を信じて、たとえ０．１％の可能性であっても、なお前向きに生きる。それが、キリスト者の生き方であるとの勧めです。

イースターには、色づけしたきれいな卵が配られます。どうして「たまご」なんでしょう。それは、ヒヨコが生まれるとき、卵の殻を破って出てくるからです。私たちの希望を阻み、私たちを暗闇に閉じ込める固い殻を破って、新しく生まれ出る命。そんな命の希望を卵は象徴しています。

私たちも、神の憐れみによって、もう一度新しくしていただきましょう。イエスの愛の力によって、人生をつくり変えていただくのです。そして、神の憐れみの器、平和の道具として、正義と平和の花を咲かせるお手伝いができるすばらしい恵みを、もう一度のこの復活祭に確認して歩む者でありたいと願います。

わたしたちの『ヨベルの年』（レビ記２５：８～１２）

在日大韓基督教会「中部地方会設立５０周年記念礼拝」説教，２０１５年２月１５日、於　名古屋教会

金性済牧師（在日大韓基督教会副総会長、名古屋教会）　※連載（２）

III. 在日大韓基督教会の「ヨベルの年」と宣教地の「買い戻し」

在日大韓基督教会の歩んできたそのような歴史の意味を、私はレビ記２５章の観点からもう一度捉えなおしてみるのです。すなわち、植民地支配から解放された１９４５年８月とは、それこそ在日コリアン・キリスト者たちのヨベルの解放の時であったと言えます。

それではその年１２月になされた在日コリアン・キリスト者の日本基督教団からの脱退と「在日本朝鮮基督教連合会」の創設をどう見るか。私は、まさにこれはレビ記２５章の言う宣教のトポスの「買い戻し」がなされた出来事だと思います。単純に土地ではなく、神が２０世紀の後半から２１世紀に向かって用いようとされる在日大韓基督教会の宣教の領域、あるいは場所の買い戻しがなされたのです。

解放直後、約２１０万人いた在日コリアンの大半が帰還し、結局、５０数万人が日本に残され、やがて、朝鮮動乱のため、完全に帰還の道が絶たれてしまいます。しかしその中で、「宣教の使命を担うための場を買い戻しなさい」という主の命令によって在日コリアン・キリスト者は、神の「宝の民」として、また「残りの者<シェアル・ヤーシューブ>」（イザヤ書１０：２０～２３；１１：１１，１６；エレミヤ書３１：７）として再び呼び集められることになったのです。

解放後も祖国に帰りそこない、祖国と懐かしい故郷から隔てられ、親族に不孝を行う罪責感を心に背負いながら、在日を余儀なくされた人々は、その恥と痛みを共にしてくださる主イエス・キリスト（ヘブライ１１：１６）のもとにかくまわれるように、無権利と貧困の現実の中で戦後の教会再建に祈りと力を注いでいったのです。そして主はその人々を十字架の愛の仮庵（かりいお）にかくまわれ、さらに未来の歴史のかなたを見つめておられたのです。

IV. 在日大韓基督教会の買い戻しを導かれた神の摂理における３つの計画

私は、在日大韓基督教会の宣教のトポスの買い戻しを導かれた神の摂理について思いめぐらすとき、今にして思えば、そこに三つの計画が備えられていたと考えます。

第一は、在日大韓基督教会と日本基督教団、及び日本キリスト教会との和解の宣教協約です。それは、日本基督教団との間に１９８４年に、また日本キリスト教会との間に１９９７年に実現しました。

そのそれぞれの協約文の本文を見ますと、明確に１９４５年以前の天皇制国家神道体制の下での政治的偶像崇拝に信仰をもって抵抗しきれずに犯した罪を、どちらもが告白し、悔い改める趣旨が記され、その前提の上に和解の再会が導かれ、そして宣教協力の道が導かれることが謳われているのです。

私はこのように仮定してみるのです。もし、この三者があの過酷な歴史を体験することなく、またあのような偶像崇拝の過ちを体験することもなく戦後を迎えていたのなら、おそらく１９８４年のような、また１９９７年のような宣教協約は結ばれることなく、ひょっとすると今日に至るまでもお互いは無関心な間柄になっていたのではないか、ということです。むしろ、神の前に罪責告白せずにおれない教会として、両教団は十字架の主に導かれ、和解と協力の道に導かれるようになったのです。

第二は、戦前・戦後、在日大韓基督教会を担ってきた在日コリアン信徒の子孫たちと、８０年代から新たに渡日してきたコリアン信徒の家族と、さらに日本人信徒、韓日の間に生まれた信徒、そして中国から渡日した朝鮮族信徒がひとつにされ、神に買い戻された在日大韓基督教会を、神の宝の民として継承していくことです。それぞれ、自分がたどってきた出自も、抱える文化も違います。しかし、それらが主イエス・キリストのひとつの体の多様な肢として愛と平和によってひとつにされる共同体として主に向かってつくり上げられる（エフェソ４：１５～１６）ことが、今日の在日大韓基督教会の内的な課題であると言えます。

自分のルーツとは何かという歴史観も文化も民族アイデンティティも異なります。しかし違いを超えて愛し合い、平和にひとつになれる共同体の模範となることを、主は願われるからこそ、今日の在日大韓基督教会があることを覚えたいのです。

これはきれいごとではなく、時には互いの違いから起こりうる葛藤や軋轢をいかに信仰に基づく知性を研ぎ澄まされ、克服するか、という訓練を、私たちはさせられているのかもしれません。

在日コリアン文化の創造と多文化共生社会を目指して、在日本韓国ＹＭＣＡは皆様と共に歩みます。

東京◆ホテル：東京で一番安く便利な宿泊研修施設。フロントは日・韓・英語に対応、24時間営業。10名様～200名様の会議及び宿泊研修（50名）も可能。
・スペースＹホール：200席の多目的ホール。セミナー・コンサートなどに対応。
・韓国文化教室【チャング・カヤグム・舞踊】・韓国語講座・各種こどもクラス
・ＹＭＣＡ東京日本語学校【3ヶ月～2年、短期研修】
関西◆にほんご教室《新規開講・募集中》韓国民俗芸術科【舞踊・チャンゴ】

税　込	平　日	休・休前日
シングル	¥6,500	¥6,000
ダブル	¥10,500	¥9,700
トリプル	¥13,500	¥12,500
朝食・コーヒー¥200（宿泊者価格）		

在日本韓国ＹＭＣＡ http://www.ymcajapan.org/ayc/jp/　＊会員及び教職者割引有。詳しくはお問い合わせください。
東京韓国ＹＭＣＡアジア青少年センター　〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-5-5　☎03-3233-0611
関西韓国ＹＭＣＡアジア青少年センター　〒537-0025　大阪市東成区中道3-14-15　☎06-6981-0782

第三は、在日大韓基督教会が、またその牧師と信徒が自分の恵みと祝福、そして自分の個教会にしか関心を持たなくなるのではなく、自分が招き入れられた教会が在日大韓基督教会としてより広い世界の中でどのような宣教のトポスを委ねられているかをしっかりと自覚することです。在日大韓基督教会は、日本社会と在日コリアン・外国人マイノリティの間に和解のしもべとして置かれているのです。

さらに、今日険悪な関係からの打開の道を見いだせずにいる日本と韓国・朝鮮の間においても和解のしもべとして遣わされているということです。韓国の韓国教会でもなく、日本の諸教会でもなく、その両者の間に立って、私たち、神に買い戻された在日大韓基督教会が神の計画に従って果たすべき和解の福音宣教の使命があるということです。言い換えれば、もし私たちが在日大韓基督教会に託されたその特別な使命を自覚できず、曖昧にし忘却してしまうなら、在日大韓基督教会としての存在理由を失うことを意味するのです。言い換えると、自分がなぜこの教会に踏みとどまるべきなのか、牧師も信徒もその存在理由を失うということです。

以上の三つの宣教課題を、神の摂理の中から買い戻された在日大韓基督教会に託された計画として、今日の在日大韓基督教会の一つひとつの教会が、そして５地方会がひとつにされていくという原点に、私たちは立ち帰らなければなりません。

（次号に続く。）

2015年、KCCJ全国教役者研修会

教育委員会では、「２０１５年全国教役者研修会」を下記のように開催します。

【日時】2015年５月18日（月）～20日（水）
【場所】ユインチホテル南城
〒901-1412　沖縄県南城市佐敷字新里1688
【主題】マイノリティと世界宣教（沖縄を学ぼう！）
【講師】金枝喆牧師（韓国ソマン教会、担任牧師）

教育委員会委員長　全聖三牧師

伝道師・宣教師研修会のお知らせ

第52回定期総会において承認された神学考試委員会細則変更に伴い、今年度から伝道師考試および牧師考試に伝道師研修会の履修が必須条件になりました。今年度の研修会を以下のように実施します。なお、同じ期間に、新しく総会に加入した宣教師の研修会も行ないます。

- **日程：２０１５年６月１５日（月）～２０日（土）**
  （開会礼拝：午後２時、閉会礼拝：午前11時予定）
- **対象：伝道師および牧師考試受験者、加入宣教師**
- **場所：総会神学校　（宿泊も含む）**
- **費用：参加費は総会負担**
- **科目：**総会憲法、在日神学、総会史、日本キリスト教史、在日宣教学、エキュメニカル神学、総会礼式書など

（問い合わせ：書記：朴栄子牧師、教務：韓聖炫牧師）

神学考試委員長　金武士
在日総会神学校校長　鄭然元

＜日本キリスト教協議会＞
NCC第３９回総会開催

日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）の第３９回総会が、３月２３日(月)～２４日(火)、日本基督教団霊南坂教会で開催された。開会礼拝は、小橋孝一牧師（議長、日本基督教団）が「十字架の主の御言葉に聞き従いつつ、共に進む」（マタイによる福音書１６章２４節）という主題で説教した。

引き続き、議事進行に入り、各報告と決算、役員選出と総幹事選任、活動方針、諸委員会設置等が承認された。本総会では、金迅野牧師（横須賀教会）が書記として選ばれた。

特別プログラムでは、東日本大震災の支援活動報告がなされた。その中で、在日韓国人問題研究所（ＲＡＩＫ）の佐藤信行所長が、被災地の移住外国人と子どもたちの実態について報告した。その後、懇親会をもって初日を終えた。

翌日は、礼拝後、報告・財政・議案審査委員会の報告や事業および予算に関する件、その他の議案と議事録等が承認され、閉会礼拝をした。

本総会では、金性済副総会長、金柄鎬総幹事、許伯基・曺泳石幹事、李明忠（委任）・金迅野牧師、金芳植長老が総代として参加した。特に、金性済牧師は、今年１１月１８～２１日に、在日本韓国YMCAで開催される「第３回マイノリティ問題と宣教国際会議」について説明し、参加を呼び掛けた。

第３９回総会期のＮＣＣ役員は、以下の通りである。

＜議長：小橋孝一（日本基督教団）、副議長：渡部信（日本聖書協会）、矢萩新一（日本聖公会）、書記：金迅野（在日大韓基督教会）、伊藤剛士（日本ＹＭＣＡ同盟）、総幹事：網中彰子（日本基督教団）＞

（報告：編集部）

＜西部地方会＞ 教育部主催 諸職研修会開催

２月１５日（主日）、西部地方会では「幸せな働き人」（Ｉテサロニケ１：１～１０）という主題で、諸職研修会（主催：教育部）が開催された。

韓澤柱牧師（教育部書記）の司会で、尹聖哲長老の祈祷後、裵明徳牧師が講師を紹介した。今年の講師は、本総会の崔亨喆牧師（枚岡教会）であった。崔牧師は、「幸せな働き人、행복한 직분자」という題で、力強い励ましと希望のメッセージを伝えた。

テサロニケ教会のすばらしい信仰は、「信仰によって働く」ことであった。さらに、「聖書は、信仰の働きである」ことを強調した（ヘブライ１１章）。なお、愛とは「神さまを愛する、自分を愛する、他人を愛することによって、はじめて愛を悟る」ことであり、希望とは、「イエス・キリストに対する希望を持って忍耐し、父なる神さまの前で心に留めることである」ことを強く述べた。

参加者たちは、各教会に戻り、愛と希望をもって、幸せな働き人として献身していくことの大切さを学んだ。今年の参加者は、４１人であった。

（報告：韓澤柱、教育部書記）

＜西南地方会＞ １日研修会開催

２月２０日（金）午前１０時３０分より、名古屋教会では、中部地方会女性連合会と青年部主催で、「一日研修会」が開催された。

第一部は、講師である鄭守換牧師（豊橋教会）が「神と聖書と世界と私」という題で講義をした。

鄭牧師は、「神とは？」という問いかけからスタートし、私たちがいかに神さまから愛されて来たか、神さまは、常にわたしたちに語りかけて下さっているのに聞こうとしないか。わたしたちの心が鈍くなっても、いつでも神の声を聞くことのできる聖書との関連性について力強く語った。

また、第二部では、昨年と同様に黄善花執事（名古屋教会）による韓国舞踊の指導があった。参加者たちは、基本的な部分と動作は、去年の引き続きだったので、体が少し覚えていたので、楽しく学ぶことでき、健康的な汗をかきながら楽しんだ。「今回もよい学びの時、よい交わりの時であった。主に感謝！」

（報告：金淑子、豊橋教会）

＜姫路教会：電話番号変更案内＞０７９－２２７－９７８６